

拝啓、天国の父へ。マ
ナリア魔法学院に行く
事になりました。

ハツガツオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

筆者のパソコンにあったボツネタを、供養として挙げました。

目次

拝啓、天国の父へ。マナリア魔法学院に
行く事になりました。

1

拝啓、天国の父へ。マナリア魔法学院に行く事になりました。

人の行き来で賑わう人里から、少し離れたある山の奥深く。鬱蒼と茂る木々に囲まれた獣道を抜けた先。日の光が草に反射し、見晴らしのいい草原にて、二人の人物による戦いが繰り広げられていた。

「うおおおおお——！！」

「はあああああ——！！」

片や黒みがかかった鎧を纏った黒髪の青年。片や動きやすい服装である、緑のジャージ姿のの髪の毛のヒューマン族の少年である。青年が携えるのは、燃え盛るような真紅の槍。その穂先は、炎を表すかのようなだった。そして、少年の得物は刀だ。しかし只の刀では無い。全長は槍と同等。それでいて刀身は六割、残りは柄の、鏢も見受けられないという既存の物とは一線を画す武器。魔法の類は一切使用しない、純粋な打ち合いが幾度となく繰り広げられている。

第三者から見れば、命を懸けた決闘とも思えるこの戦い。だが、当人たちにとってはそうでない。この二人は師弟の関係で——つまるところ、模擬戦である。模擬戦に

してはいささか全力である。特に少年が顕著だが。

「ぜええああああああ!!」

「ふっ……いいぞ、その調子だガルド。どんどん切り込んで来い!!」

「本つつつ当に、おかしいな師匠は！ これだけやっても、かすることしかできないって!!」

「経験の差だ、経験の」

笑みを浮かべた青年に軽くあしらわれてしまう。

少年——ガルドによる連撃を師である彼は裁き続け、真面に喰らえば致命傷を負う様なそれを最小限のダメージにとどめている。——もつとも、そのダメージですら鎧によつて阻まれているので無いに等しいが。

それに焦りを感じたのだろう。

ガルドは自身の得物を上段に構え、全身の筋力を総動員。全力全開。

己が持つ全てを以て振り下ろした。

「ぜえあつ!!」

斜方からの攻撃。剣速も本人の限界で繰り出されたもの。

並みの戦士なら反応すらできない程の速度。青年も「ほう……」

と感嘆の息を漏らすと同時に冷や汗を流す。最初と比べて、ここまで育ったか、と。

このままいけば、彼の身体は肩から二つに分かたれるであろう。だがしかし——
「まだまだ甘い!!」

現実はその上手くないものだ。青年はすぐさま槍を両手で平らに持ち、上部へと構える。そしてそのまま槍の柄と刃が衝突する

——瞬間、左手で滑らせるように槍を傾け、斬撃を滑らせるようにいなした。

「何!？」

ガルドは驚愕の声を上げる。——今のは完全に決まっただと思っただからだ。

逸らされた刀身はそのまま地面へと激突。草は舞い、土片が跳び上がり、地へと深い傷跡を残す。少年はその光景に呆ける。

自身の全力の一撃を、ああも簡単に凌がれては茫然とする。しかし、戦いの最中に生まれた隙を、青年が逃すはずも無く。

「詰みだ」

「くっ……」

首元に槍を当てられる。勝負は師の勝ちで終わった。その結果に弟子であるガルドは悔しそうに俯く。——今回の勝負は、彼にとつて最後の試合だった。だからこそ、最後は勝ちで終わりたいかった。悔しさで一杯、しかしそれでいて晴れやかに師に対面する。

「だあああ！ クソ、最後の最後まで勝てなかった……!!」

「俺としてもそう易々負けるわけにもいかんのだな。だが——」

言葉を切つて、少年の頭に手をやる。

「良くここまで強くなつた」

そう言つて、笑みを浮かべながらくしやりと撫でる。

「……………」

師に褒められたことで嬉しくなる。多少なりとも認められたと。が——

「だが、まだまだ甘い。剣速ももつと速く、そして精密に。それと最後のアレはなんだ。

戦闘の際には油断するなど、最初にあれ程教えただろう」

「す、すみません……」

この師匠、スパルタである。ダメ出しも容赦ない。

こうして勝負は終わり、師匠のダメ出しを聞きながら、二人はガルドの家である

山小屋へと戻つて行つた。

◇ ◇ ◇

どうも皆さん初めまして。初っ端から戦つてた少年、ガルドです。七歳の頃に父さんが亡くなつて師匠に引き取られてから十年間、鍛錬を積むのと並行でこうして時たま手合せをやつたりしてきました。いやあ、今日いきなり師匠が訪ねてきて最後の手合せを

するぞとか言うもんだから、こつちも本気でやる羽目になりました。……結局一度も勝てなかつたけど。

で、試合が終わって自宅に戻ってきて中に入ると、褐色肌の薄着の女性がテーブルに着いていた。湯呑みのお茶を啜りつつ、絵物語を読みながら。

「おお、戻ってきおつたか」

「……何でいるんですか、義姉さん」

「なんじゃとはなんじゃ、折角お主の顔を見に来たというのに」

そう言つてぷくつと頬を膨らませてもダメですよ。今までの行動を顧みてから言つて

くれませんか？ この前なんて、ルーマシーの遺跡に突撃したから肝が冷えましたよ。この人といい師匠といい、無駄に行動力があるだけでなく、飛行能力があるせいで、他の島への移動に騎空艇いらずだから、尚更性質が悪い。これに警戒心を抱くなどいう方が無茶である。

あともうこれ以上絵物語を持ち込んで増やすのは止めてください。販売会がある度に購入してくるもんだから、本棚が一杯なんです。というか、放置しないで欲しいのです。

「別にいいじゃろう、お主も読んでおるんじやし」

「ええ、おかげでネタがこれでもかというぐらいに増えましたよ……ってそうじゃない。そろそろ読まないやつを処分したいんですが……」

「ダメじゃ」

「何でじゃ」

「当たり前じゃ！ 妾のこれくしよんを勝手に捨てるでない!!」

「ここ俺の家なんですが……」

「妾のものは妾の物。そして、お主の物は妾のものじゃ!!」

「どこのガキ大将だアンタは」

そんなやり取りをしていると、師匠が外から戻ってきた。その顔には、呆れの色が浮かんでいた。

「相も変わらず、お前らは飽きないな……」

「それは義姉さんに言つて欲しいんですがねえ……つと、そうだ。お二人に聞きたいことが」

「何だ？」

「何故二人して、俺の元に？」

普段なら偶にやってきては俺と手合せをするか、俺をおちよくつて帰って行くか、絵物語を放置してから帰るかのどれかだ。もしくは俺を連れて、他の島へとダイナミック

エントリーするか。だが、それは師匠か義姉さんのどちらか一方のみだ。二人してやってくるときは、大体何かある。

今日だつてそうだ。最後の手合せと言つて模擬戦をやったのだから、これは最早確定だろう。それを伝えると、師匠が鎧から何かを取りだし、俺に渡した。

「これは……封筒？」

裏を返して、差出人を見ると……へえ。マナリア魔法学院ねえ。

マナリア魔法学院。そこは、ファータ・グランデ空域にて最高峰の魔法学校であり、多くの生徒達が種族の枠を超えて学問に勤しむ場所だ。最古の魔法図書館でもあり、学院内の魔法図書館には入門用の魔法書を始め、それこそこの空域に一冊しか無いような禁書まで幅広く莫大な量の書物がある。

だが問題は、何故師匠が学院からの手紙を持っているのかだ。少なくとも師匠とは縁が少ないはずだ。いや、まあ、風魔法と炎魔法の組み合わせたもので空飛んでるけども。義姉さんは義姉さんで、翼があるし、風魔法に精通しているし。

けれども、この二人が学院の関係者と知りあいからこれを貰っただけで来るはずが無い。そう思つて、師匠達を見ると……二人して笑っていた。その光景に嫌な予感を感じつつも、言葉を促す。

「……師匠。これは一体なんですか？」

「開けて見ろ」

そう言われて、中身を取り出すと……。

「受験票……—つて、おい！ ちよつと待て!? 何でこれがあるんだよ!? しかも俺の名前入りで!!」

「何でつて、俺達が申し込んだからに決まっているだろう?」

「当たり前のように言つてんじゃねえよ!! 何時誰が受けると言つた!? マナリアのマの字すら会話に出してねえのによ!!」

「マナリア魔法学院へ行け。答えは聞いていない」

「お主はマナリアを受けろ、いいね?」

「アツハ——じゃない、説明を放棄すんな!! まるで意味が分からんわ!!」

「考えるな、感じろ」

「そうじゃそうじゃ、察しの悪い奴め。勘の良い奴は嫌いじゃが、鈍すぎるのも好きでない」

「何で俺が悪いみたいになつてんの、ねえ!? 俺何一つ悪くないよね!? むしろ悪いことやってんのはアンタ達だよね!」

「さて、これについて説明するか」

「人の話を聞けえええええ!!」

肺の空気と一緒に一気に捲し立てたせいで、息が切れる。あーもう、本当にこの人達は……つまりはそういう事か。最後の勝負だの言つてたのは、俺を遠く離れた地であるマナリアへと送るために、しばらく会う事が出来ないからこそつてことか。そう伝えると、師匠はうんうんと頷いた。

「その方が本気を出すと踏んでいたからな」

「この人は……！」

「あははは！ 見事に嵌められたのう!!」

そう言つて義姉さんはケラケラと笑う。だまらつしやい。ああいう風に、しかも有無を言わせない雰囲気を出されたら誰だつてそうするしかないでしょうが。俺だつてそうしたんですし。……つてそうじゃない。何で俺をマナリアに送るんですか。

「お前の父との約束でな。武術と魔法、その両方を鍛えてやつてくれと言われたんだ」

……そうだったのか。俺の父と師匠は種族こそ違うものの、互いを認め合う友達だと聞いていた。その父の願いを汲んで、俺を魔法学校に行かせようと……。

「師匠……」

「じゃあ何で、武術一辺倒だったんですか」

「……………(サツ)」

「いや、こっつち見ましようよ」

目、逸らすなよ。そもそも魔法学校に行かせるのが分かりきってるなら、多少なりとも魔法も教えて欲しかったんですが。それを何がどうして物理特化になったんですかねえ……。おかげでそこいらの魔物や盗賊には遅れをとりませんけど。

「だったら良いだろう。細かいことは言うな」

「開き直ってんじゃねえよアンタは」

あまりに清々しい開き直りっぷりに、こちらも素で返してしまふ。まあいい、仕方ない。試験の為に、今から準備を始めないと。

「ちなみに試験日は？」

「一カ月後じゃ」

「ふざけてんのか」

残り一カ月？ これは無理だわ。具体的に言っていると、帝国の本拠地に素手で殴り込みに行く位。それを乗り越えろとか、不可能にもほどがあるわ。こちらら座学とはほぼ無縁だぞ。無理だ無理。そんな最初から分かりきってる事なんて、どうしようもn——え、ちよ、何で二人ともいい笑顔で迫ってくるんですか。その両手に持っている参考書の数々は……え？ 俺に覚え込ませる為？ はっはっは、冗談キツイですな二人とも。試験までは残り一カ月なんですよ？ そんなもの覚えられる訳がな——やめろオ！ 離

せ!! 縄で拘束するんじゃねえ!! とうか、何だこの縄は!! これだけ力を込めても切れないとか!!

こうしている間にも、無情に着々と進められていく。

「まずは魔法基礎からだな」

「うむ、その次は錬金術じゃ」

く、来るな! じりじりと来るんじやない! やめろ……やめろ……

「俺のそばに、近寄るなああああああッ!!」

——こうして一か月間、彼はみっちりと缶詰状態で勉強をさせられた。それはもう、二度と思い出したくもやりたくも無いレベルで。

そして月日が過ぎ、精神と肉体共にボロ雑巾の状態で試験を受けに行ったのだった。絶対に受かるわけないだろうと思いつつながら——。

——試験から一カ月後——

「喜べ。合格通知が届いたぞ」

「嘘オ!?!」

——かくして、ガルドのマナリア行きは決定したのだった。